

ZERO POINT

REPORT 前編

多くの舞台関係者とメディアが駆け付けた記者発表会では、ジョンストン氏のほか、酒井はな氏、島地保武氏、当館からは藤田直義館長が登壇し、それぞれが今プロジェクトの経緯やコンセプト、抱負などを語りました。

6月26日に美術館ホールで世界初演の幕を下ろした日英豪国際共同製作によるパフォーマンス「ゼロ・ポイント」。本公演が実現した背景には、2013年に当館アーティスト・イン・レジデンス事業として行われた、気鋭のイギリス人振付家ダレン・ジョンストン氏の3ヶ月にわたる高知での滞在制作がありました。「ミニマルアートへの興味が、高知でのレジデンスによってお遍路や東洋の思想に繋がっていった」と語るジョンストン氏の構想は、国際的に活躍するミュージシャンのティム・ヘッカー氏が手掛けた楽曲のもと、酒井はな氏、島地保武氏をはじめとした日本人トップダンサーたちを迎えることで、考えうる限り最高のかたちで実現されたのです。夢のような公演の舞台裏を前後編で2号続けてお送りします。今回の前編では、4月11日に行われた記者発表と、2ヶ月以上にわたる行われたリハーサルの様子をレポートします！

文〇朝倉 芽生 (当館企画事業課)



ダンサーにテーマを与え、それぞれの動きを引き出すジョンストン氏。それぞれの自由自在なイメージをダンサーたちが紡いでいきます。クラシックバレエとコンテンポラリーダンスという異なるジャンルのダンサーが入り交じる今回の舞台では、この手法によってそれぞれの個性を引き出しながら作品の幅を広げていきました。

全員が息を合わせて一つの大きな生き物のように踊る群舞から、まるで小さな生物が生まれる瞬間のようなソロまで、ジョンストン氏の構想が次々とカタチづくられていきます。



汗と涙の滲む数々のクリエイションの果てにあの公演が実現したと考えると、感慨深いものです…。次号では、引き続き貴重なオフショットとともに後編レポートをお届けします。

(上段)飯島望未、近藤美緒、島地保武、酒井はな、安岡由美香
(下段)鈴木奈菜、大手可奈、ダレン・ジョンストン、辻田暁、
中間アヤカ、水野多麻紀



65年前の 展覧会を 再現する

石元泰博・コレクション展の現場から

再現:ディオゲネス・ウィズ・ア・カメラV

【前期】2016年4月5日[火]～6月20日[月]
【後期】2016年6月25日[土]～8月7日[日]
会期中無休 9:00～17:00(入場は16:30まで)
観覧料:一般360(280)円、大学生250円(200円)、高校生以下無料
※()内は 20 名以上の団体割引料金。

1961年9月、ニューヨーク。今から65年前、マンハッタンの中ミッドタウン53丁目にある近代美術館(MoMA)のオーディトリウム・ギャラリーでひとつの写真展が開かれた。展覧会のタイトルは「ディオゲネス・ウィズ・ア・カメラV」。個展形式の三人展で、ルシアン・クレグ、ビル・ブランドと一緒に石元泰博の作品が展示された。この事実とはときおり石元のプロフィールに「ニューヨーク近代美術館で個展」などと言われるものの、その実態はいまひとつよくわからず、はたしてどんな展示だったのだろうか、常日ごろ疑問に思っていた。

そんなある日、いつものようにプリント作品の整理をしていたら、偶然にも当時の展示風景を撮影した写真に出くわしたのだった。なるほど、この作品がこんな風に展示されていたのか、と膝を打つ。この写真から展覧会を再現してみたらおもしろいに違いないとも考えた。美術館業界では「過去に行われた展覧会を再構成する展覧会」というものがささやかなブームでもあるらしい。批評文や報道記事などの言説によって「歴史」として定着された「展覧会」を、今一度この空間に再現し再検証する。それは歴史の再確認あるいは再検討を意味

するのだろう。そういうことも少しは頭の片隅にあったのだけれども、このディオゲネス展を再現したいと思ったのは、当館のコレクションの中に当時展示で使われた可能性の高いプリントがあったことが大きい。このヴィンテージ・プリントで、65年前のニューヨークに立ち現れていた「空間」をここ高知に再現する。これはひとつの奇跡と呼んでもよいのではないだろうか。奇跡の瞬間のため…。そんな単純な動機から、いま美術館には65年前のニューヨークが、時空の裂け目から顔をのぞかせている。

文〇植田 憲司(当館学芸員)

I.Y.P.C.
The Museum of Art, Kochi Ishimoto Yasuhiro Photo Center

著作権の都合上、表示できません

挿画本「ダフニスとクロエ」より(原)リトグラフ、42.2×31.8cm

collection-vol.93

ダフニスとクロエ

マルク・シャガール

初版1961年(出版者テリアド)、リトグラフ42点を含む挿画本
ED. 95 / 250

エーゲ海のレスボス島を舞台に繰り広げられる恋愛物語、「ダフニスとクロエ」。まだ本当の愛を知らない純朴な少年少女がやがてエロスに目覚め、様々な障害を乗り越えて結ばれるまでを描いたこの物語は、古代ギリシアの詩人ロンゴスの手によると伝えられています。

マルク・シャガールが美術出版・編集者のテリアドに、カラー・リトグラフによる「ダフニスとクロエ」の挿画制作を依頼されたのは1952年のこと。48年刊行の挿画本「アラビアン・ナイトからの四つの物語」において初めて本格的なカラー・リトグラフ制作に取り組み、その表現に更なる可能性を見出した当時のシャガールは、リトグラフ専門工房として名高いパリのムルロ工房に足繁く通い、版画技法の習熟に努めました。また、52年と54年には二度にわたるギリシア旅行を敢行、物語の舞台とされる各地を訪ねて創作のイメージを膨らませます。その後、同工房の刷り師シャルル・ソルリエとの共同作業によって、およそ3年の月日を費やし42葉に及ぶカラー・リトグラフは刷り上げられました。

本作品群では、随所にカラー・リトグラフならではの多色刷り技法を活かした色彩表現が見られます。シャガールは自らの思い描く色彩を実現するため、1画面につき実に20回から25回の刷りを重ねたといいます。たとえば左の《扉》の画面左下、オレンジがかった深みのある色調で表された少女クロエの頭部は、赤や黄色といった暖色のインクを施した原板を、数回にわたって重ね刷りしたことによるもの。濁りのない単色同士を重ね合わせ、彩度を保ったまま奥行きのある色彩を出すことを可能とするカラー・リトグラフは、シャガールの鋭敏な色彩感覚を発揮するのに最適な表現媒体でした。牧歌的な物語世界を豊かな色彩で謳いあげた一連の作品群は、色彩画家としてのシャガールの本領を余すところなく私たち鑑賞者に伝えてくれます。

文〇中村 麻莉(当館学芸員)

編集後記 Editor's note



はじめまして、新人学芸員兼本誌編集長の中村です。遡ること3ヶ月前、約780kmの大移動の果てに辿り着いた高知県。日差しの強さと雨の激しさと地元産トマトの美味しさに驚きつつ、はじめての編集作業に取り組みました。色々な方に支えられながら何とか形になったKENBI LETTER 93、お楽しみいただけましたら幸いです。
編集担当〇中村麻莉(当館学芸員)

[表紙写真]左から《花器(チョウセンアサガオ)》エミール・ガレ、ナンシー 1898年頃 ©Museum Kunstpalast, Düsseldorf, Foto : Walter Klein、《ランプ(風景とツバメ)》エミール・ガレ、ナンシー 1900-1904年頃 ©Museum Kunstpalast, Düsseldorf, Foto : Walter Klein、《簡型花器》エミール・ガレ、ナンシー 制作:ブルグン・シュヴェーラー商会、マイゼンタール1895年頃 ©Museum Kunstpalast, Düsseldorf, Foto : Studio Fuis-ARTOTHEK [発行]高知県立美術館 [発行日]2016年7月10日 [デザイン]タケムラデザインアンドプランニング

KENBI LETTER THE MUSEUM OF ART, KOCHI 高知県立美術館通信

アール・ヌーヴォーのガラス

デュッセルドルフ美術館 ガルダ・ケプフ・コレクション



知りたくない？ ガラスのこと。

93
2016年7・8・9月

井浦新さんに聞く、時々灰色の空、向き合っていた人が見る空ですね」

「人物のポートレートとなると、風景とはまた違うなっ」

「大原治雄写真展」ブラジルの光、家族の風景」をみて

彼の写真を見ていると、ちゃんと大地の広さを知っている人なんだな、と思います。ただ突っ立っている人の視線ではなく、いつも大地とすれすれのところで仕事をしていた人のまなざしを感じます。

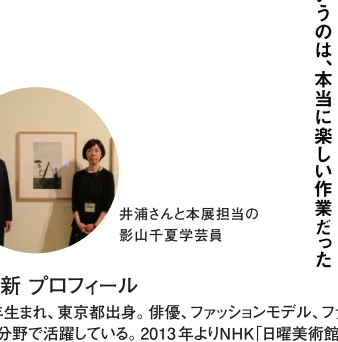
「日常の中にあるものに、ちよつとだけ、自然な演出を加えているよね」

自然風景と人物を撮っているもので、アプローチが違うのも面白いですね。(大原治雄の)農作業や畑の風景の写真からは、どれも大地の広がりをもっと感じます。ご自身がいつも見ている景色だから、無意識の癖みたいなものもあるのかな。でも、人物の写真となると、その縛りから解放されている感じがするんですよ。全部がもっとラフというか、思いのままに撮っている感じがして、その二つがちょうど混ざったのが、この傘を持った女の子が梯子からジャンプしている写真なのかも。

井浦 新 プロフィール
1974年生まれ、東京都出身。俳優、ファッションモデル、ファッションデザイナーと、多彩な分野で活躍している。2013年よりNHK「日曜美術館」の司会を務める。



治雄の娘・マリアと甥・富田カオス
1955年、パラナ州ロンドリーナ、富田農園
Haruo Ohara / Instituto Moreira Salles Collections



蠢く色とかたち

今回は華やかな形と色彩が見る目に楽しい作品も多数展示しています。中でも特に際立った存在感を放つのがこちらの花器。燃えるような極彩色と、その上を這うあまりにリアルなカタツムリが目にとざります。オレンジ色から紫、白へと色を変化させていくブドウの葉の大胆な色彩、ブドウの実と呼応するように増殖する鱗目や斑点は、めくるめく装飾の世界を展開しています。

《花器〈ブドウとカタツムリ〉》
ドーム兄弟、ナンシー
アンリ・ベルジェ（ナンシー）のデザインに基づく
1904年
©Museum Kunstpalast, Düsseldorf,
Foto : Studio Fuis-ARTOTHEK

空間を支配する小宇宙

色とりどりの個性豊かなガラスたち。中には見つめるほどにその奥深さに吸い込まれてしまいそうな作品もあります。

そのような意味で担当イチオシの作品がこちらのスイレネの池をモチーフとする1点。西洋でスイレネといえば印象派の画家クロード・モネ(1840-1926)の絵画が有名ですが、同時代に作られたアール・ヌーヴォーのガラスにも、スイレネが多く取り上げられます。本作では繊細に彫り込まれた白いスイレネと、その奥に表現される霧が立ち上るような余白の色の変化によって、ゆったりとした空間が演出されています。小さな作品をのぞき込むだけで、目の前に静かな池の情景が広がるようです。

《花器(池の情景)》

デザインおよび制作：ウジェーヌ・ミシェル、パリ
ガラス生地：不詳
1898-1904年頃
©Museum Kunstpalast, Düsseldorf, Foto : Walter Mein



異国との遭遇

さて、アール・ヌーヴォーのガラスの紹介のはずが、いきなり布袋さんと遭遇してしまいました。実はこの布袋さん、元ネタは日本が誇る浮世絵師・葛飾北斎の絵です。19世紀のヨーロッパを覆った日本ブーム(ジャポニスム)は、初期のアール・ヌーヴォーのガラスのデザインと切っても切り離せない社会現象でした。よく見ると布袋さんのほかに、日本人に親しみ深いモチーフが脈絡なく組み合わせられています。花器の正面には蓮の実が彫られ、左右に取り付けられたブロンズの取っ手はなんと象の頭の形…!

この作品はほんの一例ですが、東洋と西洋が出会った時代に生み出された、数々の意外性に富んだデザインが展示室でみなさんをお待ちしています。

《象の頭の飾付花器》
デザインおよび制作：不詳
販売：パニエ兄弟商会エスカリエ・ド・クリスタル、パリ
1883-1885年頃
©Museum Kunstpalast, Düsseldorf, Foto : Studio Fuis-ARTOTHEK



これ、ぜーんぶ、「アール・ヌーヴォー」なんです!!

アール・ヌーヴォーとは?
1890年から1910年頃にかけて、ヨーロッパ諸国を中心に開花した芸術運動。植物などをモチーフとした、曲線美を強調したデザインが特徴です。その華やかで美しい表現はさまざまな形で人々の生活の中にまで入り込み、「新しい芸術(Art Nouveau)」の旋風を巻き起こしました。

アール・ヌーヴォーの一番の特徴は、なんといっても植物や水など、自然をモチーフとした美しいデザインです。中でもおススメしたいのが、自然のチャームポイントを見つける天才、エミール・ガレ(1846-1904)の諸作品です。

オレンジと紫のコントラストが美しいこちらの花器は、ガレがオダマキの花をモチーフに考案したもの。紫色の花びらの根元から伸びる、先の丸まった角のような突起が見えますか? これはオダマキの「距」とよばれる部分で、ガレはそんなオダマキ独特のチャームポイントを逃さず描きこんでいます。つづいて台座をご覧ください。何かに似ていませんか?

そう、こちら実はオダマキの「距」の形をもとにデザインされた特注の台座です。どこまでも植物特有の形の美にこだわって作られた本作、「なんてマニアックな!」と思う方もいるかも知れませんが、そんなマニアックかつストイック、情熱的とも言える植物との向き合い方も、ガレ作品の面白さです。

《花器(オダマキ)》
エミール・ガレ、ナンシー 1898年
©Museum Kunstpalast, Düsseldorf,
Foto : Walter Klein

「魚をテーマにガラスをデザインしてください」と言われたら、みなさんはどのようなものを作るでしょう?

ガレは、泳ぐ魚が川面を突き破って顔を出した瞬間をとらえてガラス作品に仕立てました。自然と常に向き合い、ガラスをデザインする際にも自然から多くのインスピレーションを受けていたと言われるガレ。その着眼点に「どうしてその瞬間を切り取ると思ったの!？」と驚かすにはいられない1点です。

《花器(淡水魚)》
エミール・ガレ、ナンシー
1899/1900年頃
©Museum Kunstpalast, Düsseldorf,
Foto : Studio Fuis-ARTOTHEK



デザインに込められた自然の面白さ



私が中谷です!



アール・ヌーヴォーのガラス

ヨーロッパ随一のガラスコレクションを有するドイツ、デュッセルドルフ美術館。なかでもアール・ヌーヴォーの精華を集めた「ゲルダ・ケプフ・コレクション」が、今夏、高知に初上陸します。美しく、心が浮き立つような作品が勢ぞろいする本展。担当の学芸員が見どころをご紹介します!

2016年 6.26 [日] 8.28 [日]
9:00 Open 17:00 Close (入場は16:30まで) 会期中無休

主催 高知県立美術館、KUTVテレビ高知
後援 ドイツ連邦共和国総領事館、高知県教育委員会、高知市教育委員会、高知新聞社、NHK高知放送局、KCB高知ケーブルテレビ、エフエム高知、高知シティFM放送
照明設計協力 パナソニック株式会社

観覧料 一般前売900円/一般当日1,100円(880円)/大学生当日800円(640円) 高校生以下無料
※()内は20名以上の団体割引料金。※年間観覧券所持者(2,580円)は無料。
※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳及び被爆者健康手帳所持者とその介護者(1名)、高知県及び高知市の長寿手帳所持者は無料。
ドイツと日本
Zukunft gestalten
ともに未来へ

Art Nouveau Glass

The Gerda Koepff collection from the Museum Kunstpalast, Düsseldorf